

テーマ「奄美の歴史③」

あまみエフエムデイ！ウェイブをお聞きの皆様、おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今日は「奄美の歴史」シリーズの第3回目です。

前回お伝えしましたように1609年、薩摩藩は琉球王国を征討^{せいとう}し、以後奄美は、薩摩藩の領土となりました。1830年には、藩の財政立て直しが始まり、大島・徳之島・喜界島の三島の黒糖は、藩が総買い上げを行います。農民は無理やり増産を強いられ、苦しい生活をしました。このような中で江戸時代の末期、黒糖の値段が下がってくると、薩摩藩は白糖^{はくとう}製造を計画します。英国人の技師であったウォートロスとマッキンタイラーを招^{しょう}聘^{へい}し、奄美大島の4か所に白糖製造工場を建設しました。瀬留^{せどめ}（龍郷町）、金久^{かねく}（名瀬市）、須古^{すこ}（宇検村）、久慈^{くじ}（瀬戸内町）の4か所に建設しましたが、台風の被害や燃料の薪^{たきぎ}の不足等が原因で、5年以内で閉鎖^{へいさ}されました。その跡地には、現在でも使用された耐火煉瓦^{れんが}や建築用の煉瓦^{はへん}の破片が残っています。煉瓦技師であったウォートロスは後に、英国の商人グラバーの紹介によって大阪造幣^{ぞうへいりょう}寮の建築や銀座の煉瓦街を設計し、全国にわたる活躍で有名になりました。

さて、明治時代になり、薩摩藩統治下時代から続いた奄美への支配はそのまま引き継がれ、鹿児島県は商社をつくって黒糖販売の独占化をはかります。しかし、明治の中期になると、奄美は経済的に切り離され、独立経済となり、それは1940年まで続きました。

1941年、太平洋戦争がはじまり、1945年に終戦を迎えた奄美は、翌年の1946年2月、本土と行政分離され、米軍政府下におかれました。この日を境に本土と自由に行き来することができなくなりました。本土と切り離され、生活に必要な物資が入ってこなくなったことで、奄美をはじめとする人々の食料不足はひどくなる一方でした。生きていくため、本土に仕事を求めて密航したり特産の黒糖を本土で売って食料を手に入れ、それを持ち帰るために更に密航したり、する人もいました。奄美の人々は、日本本土と切り離されて以降、復帰を果たすために様々な努力をしてきましたが、その願いは叶^{かな}えられませんでした。

そのような中で、アメリカは1950年、日本を独立させるための講和条約の準備を進めていました。しかし、この講和条約の草案の内容は、北緯29度以南の南西諸島を米軍の信託統治^{しんたくとうちか}下に置くというものであり、このまま条約が結ばれると、奄美の日本復帰は更に困難になります。「生活が苦しい」「早く日本に帰りたい」「日本人を日本に帰せ」という人々の強い思いは日に日に高まり、1951年に奄美大島復帰協議会が結成されます。その初代議長に就任したのが泉芳朗^{いずみほうろう}氏です。

泉は、元々は小学校の教師で神之嶺^{かみのみね}小学校の校長になった後に、大島地区の視学^{しがく}に任用され、教師たちの指導を行っていました。また、詩人として各地の青年団や

婦人団体に文学の指導を行い、誰に対しても親身になって相談に応じる包^{ほう}容^{よう}力^{りょく}のある人柄が、周囲の信頼を集めていました。議長となった泉は、周囲の人々に「復帰運動は民族運動であり、民族運動は暴力に訴えてはいけない。我々の復帰運動はあくまで平和主義でいこう、非暴力主義でいこう、無抵抗の抵抗でいこう」と訴えました。復帰運動の第一歩は署名運動から始まり、署名運動と並行して当時の日本政府やマッカーサー元帥^{げんすい}等への電報による陳情^{ちんじょう}活動も行われました。また、各地での祖国復帰決起集会は計27回行われました。1951年に名瀬市で開かれた決起集会において、泉は、「祖国復帰の民族的悲願を断食で世界に訴えようではないか」と提案し、まず自ら高千穂神社で5日間の断食祈願も行いました。「泉芳朗、断食に入る」の知らせは直ちに奄美全島に広まり、各地で続々と決起集会が開かれ、小学生から老人までの参加者たちも、その場で24時間の集団断食祈願を行いました。この様子は「奄美のガンジー」として大きく全国紙で取り上げられ、復帰運動が本土の人々にも伝えられたのです。1952年、泉は、復帰協議会や青年たちの後押しを受け、名瀬市長に選ばれます。就任後すぐに、泉は、当時の鹿児島県知事に復帰を要請するとともに、東京でも吉田茂首相や岡崎勝男^{よしだしげる}外務大臣、アメリカ大使と会見を行い、奄美の祖国復帰を訴えました。

こうして復帰運動が大きく動き出す中、1953年、アメリカのダレス国務長官が「アメリカ政府は、奄美群島を日本に返還する用意がある」との声明を発表します。この声明から4か月後の12月25日、奄美群島は日本に復帰を果たします。8年間に及ぶ復帰運動がやっと実を結んだ瞬間でした。

現在の奄美群島では、12月25日が、日本復帰記念日として定められています。ちょうどクリスマスにもあたる同日には、各地で記念の集いが催され、復帰運動の父として、泉のことも語り継がれています。そして今年度は、奄美群島日本復帰61年目でした。

今回の「奄美の歴史」は、鹿児島県教育委員会が作成した『続・郷土の先人「不屈の心」』と奄美市ホームページ掲載「奄美の歴史概要」を参考にさせていただきました。県立奄美図書館には、泉芳朗氏に関する本もたくさんあります。ぜひご覧ください。職員一同、皆様のご来館を心からお待ちしております。

以上、鹿児島県立奄美図書館でした。